
IS ～インフィニット・ストラトス～ 秋の夜空のFomalhaut

輝雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 〜インフィニット・ストラトス〜 秋の夜空のF o m a l
h a u t

【Nコード】

N7921X

【作者名】

輝雪

【あらすじ】

目が覚めると別世界……。主人公の兄として転生してしまったようです。誰かが俺をISの世界に送ったようですね、ご丁寧にISまで用意してくれて。まったく何所のどこか知りませんが見つけたらお仕置きですね、ふふふ。でも、今はとりあえずこの世界で生きることが優先でしょうか。

オリジナルキャラクター・プロフィール（前書き）

オリキャラの設定です。

まあ、こんな感じで。

機体を変更しました。

オリジナルキャラクター・プロフィール

本作の主人公

名前…織斑 千秋

性別…男

年齢…15歳（転生後）↓原作時は16歳

身長…176センチ

体重…62キロ

血液型…B型

容姿…薄い金色の髪

顔は上の中

趣味、特技…特になし。

IS…ガンダムエクシア

フリーダムガンダム

ユニコーンガンダム

備考…気が付いたらISの世界に存在していた男。

自分の感情を制御するのが得意で、感情を隠すのも上手く、『嘘が特技ではな

いか』と言われたことがある。

丁寧な口調や態度だが、中身は意外と外道で鬼畜でドS。

“勝てば官軍”という言葉が座右の銘、正々堂々という言葉は千秋の辞書には

ない。『世の中、勝った者の勝ち』と考えている。

面白ければ面倒事も良いかな、と思っている。あくまで自分を捲き込まない範囲

で……だが。

特技は無いというより、基本的に出来ない事はない奇才。

意外と自信家でもあるが、それで人を見下す事はしない（た

だし、気に入らない相

手は別）

髪が金色なのは生まれつきである（転生前の織斑千秋本人は染めていた）

『何か鬱陶しい』という理由で女尊男卑をぶっ壊そうかなあ、と現在考え中。

主人公の妹

名前…織斑 美夏

性別..女

年齢..一夏と同年

身長..158センチ

体重..非公開

容姿..肩までの綺麗な黒髪、顔は少し千冬に似て整っている。

スタイルも姉に似て良い。

美人というよりは可愛いという言葉が当てはまる。

趣味..運動、お菓子作り

特技..料理

備考..一夏の双子の妹。

料理は特技というだけであって、一夏よりも腕が上。

一夏以上に優しく、世話焼きで、千秋を一番心配していたのも実は美夏である。

普段は表に出さないが、実は極度のブラコンで千秋に一番懐いている。

現在は『聖マリアンヌ女学院』に通っており、生徒会に所属。

五反田蘭とは親友の間柄、箒や鈴とも仲が良い。

性格もよく、容姿も良いので学園の外に非公式のファンクラブがあったりする。

オリジナルキャラクター・プロフィール（後書き）

以上です。

後は、随時更新していきたいと思っています。

第1夜 目覚め（前書き）

初めまして、輝雪といいます。

この小説はオリジナル、捏造設定、主人公最強などが多少、入るかもしれません。

そうゆうのは好きじゃないという方は気を付けてください。

あまりひどくするつもりはありませんが念のためです。

それを知った上で楽しんで頂ければ幸いです。

第1夜 目覚め

side?

ああ、知らない天井ですね。

……表現がありきたりすぎるでしょうか？
って、落ちついてる場合じゃなさそうですね。

「何所でしょう、ここは？」

ベットで寝てたらしい体を起こし、少し警戒しながら部屋を見回す。
特に特徴のない普通の部屋。

「ふむ……」

まったく覚えのない間取り。

監視カメラなどは見当たらない、もっとも隠しカメラがあるかもしれないが。

誘拐&監禁という訳ではなさそうですね。
窓も開いてますし……。

一体どうなっているんですか？

部屋の端にテレビがあり、とりあえず少しでも情報を、とベットの近くにあったリモコンでテレビを点ける。

『先日、政府よりISに関する発表が———』

……は？

IS？

「ISって……なんです？」

正体不明。

聞いた事も無い。

いや、聞いたことはあるが小説の……まさか。
一体どうなって……。

ガチャ

顎に手を当て、思考していると突然、扉が開いた。

「おお、目が覚めたんだな？ よかった」

そっちに目を向けると、黒髪の少年が立っていた。

「突然、熱出して倒れたから心配したんだぜ」

親しげに少年が話しかけてくる。

「え、ああ、大丈夫です。ありがとうございます」

一応、無難な答えを返しておく。

……一体、誰でしょうか？

「何だ？ 妙に他人行儀だな」

「えーと、すいません？」

他人行儀もへったくれも他人なんですが……。

あなたこそ、何故そんなに親しげなんですか？
思わずツツコンでしまいそうになりましたがそこは自重。

「まあ、元気そうで何よりだ。千冬ねえも心配してたから電話くらいしてやってくれよ。」

じゃあ、俺は学校に行ってくるから」

一方的にそう言って黒髪の少年は部屋から出て行った。

「え、あ、ちよっ……」

パタンと扉が閉められた。

「い、意味が分からない……」

つい、こんな呟きをしてしまった俺は悪くないですね？
本当にどうなっているんでしょうか。

★★★

あれから数日……。

食事とトイレ以外はあの部屋に籠りきり、この世界の事を調べてみた（部屋にあったパソコンで）。

今、引き籠りやらニートという単語が頭にちらついた方はまさか、いませんよね？

さて、とりあえず結論だけ言うと、どうやら俺は別の世界に来てしまったようでした。

IS インフィニット・ストラトスという小説の世界に。

何年か前に、一度だけ小説を読んだことがあります。

これは所謂、転生というやつのようなものでした。

憑依ではなく転生……つまり、身体も頭脳も元も世界の俺の性能で
した。からだ

身長が縮まっっていて、オマケに若返ってましたが……。

こちらでの俺の名前は織斑おりむら 千秋ちあき。

平行世界の俺と入れ替わったということなのでしょうか？

写真を見ましたが顔もそっくりで下の名前も同じでしたし。

そのあたりの詳しいことはわかりませんが……。

でも、一つ確実なことは俺はここに偶然来たわけではないということです。

その証拠がISだった。

何故かISを俺は持っていました。

いや、持っていたというよりは在[・]ったというべきでしょうか。

漆黒いリングに朱い模様が入った“ネックレス”

起動はしてませんがデータは見れました。

三機のガンダムが入っていました。

つまり何者かが、（この場合は神と仮定すべきでしょうか？）

俺にこのISを与えこの世界に送り込んだ可能性が高いですね。

まあ、それはともかく、これからどうするか……ですが。

「とりあえずは、学校に行きますか」

今、俺は高校一年らしい。

15歳です。

今さらですが、名字からも分かるようにこの物語の主人公である織斑一夏の家族です。

1つ、年上の兄です。

現在一夏は14歳、中学生でした。

なので今は原作一步前イレギュラーといったところでしょうか？

もっとも、俺という兄イレギュラーの存在が存在しているので原作なんて意味を成さないのかもしれませんが。

まあ、その辺はもう少し心の整理をしてからですね、今は、

「まさか、大学まで行って卒業・就職という社会人デビューもした俺がもう一回、高校に行く羽目になるとは夢にも思いませんでした」

壁に掛った制服に背を通しながら独り言を呟く。

まあ、ここ数日、部屋にあったパソコンでこの世界の事を調べた
め部屋に籠りきりでしたし。

ちようど良い機会ですね。

ちなみに通っていた高校は生徒手帳で知りました。

部屋を出て、一回のリビングに降りる。

家には誰もいませんでした。

一夏は学校に行ったのでしよう。

姉である織斑千冬はあまり家には帰って来ないようです。

玄関まで行き、靴を履く

織斑千秋の靴はどれなのか分かりませんが、適当にサイズの合う靴
を選び履く。

多分、この靴でしょう。

ん？ この靴は誰のでしょう？

玄関の端にあった少し小さめの女性の靴……千冬のものでしょうか。
まあ、関係ないですね。

靴を履き終え、例のネックレスを着けているか確認……うん、大丈夫みたいですね。

誰かにばれたら大変ですから、シャツの中に隠す。

適当に教科書を詰めた鞆を持って、玄関を出す。

戸締りはもちろんしっかり確認しましたよ。

さて、それでは行ってみるとしましょうか、藍越高校に。

あ、そういえば学校の場所が分かりません……。

「……………」

速攻でここ周辺の地図を探す俺の姿があったとか。

第1夜 目覚め（後書き）

最近、学校が忙しいので更新が遅くなってしまうかもしれませんが許してください。

課題がいっぱいで、鬱ですが頑張って終わらせてます。

第2夜 予想外（前書き）

第2話です。

誤字脱字などがありましたら報告お願いします。

では、どうぞ。

第2夜 予想外

side 千秋

今、時間は朝の8時30分。

昨日に続き、今日も見事な晴れ模様です。

まったく、人生は焦ってはいけませんよね、あ、ドーナツの形をした雲が。

ゆったりと余裕を持たないと余裕を……。

空を見上げて、ふう、とため息一つ。

まあつまりですね、俺は今、何が言いたいのかというと、

「完全に遅刻ですね」

迷った。

見事なまでに迷いました……。

空を見上げて、現実逃避するのはやめましょうか。

Q、さて、問題です。ここは何所でしょうか？

A、知らない公園のベンチです。

「はあ、なにか面倒くさくなってきましたね」

ため息とともに呟く。

学校目指して歩いていたら、あら不思議いつの間にかこんな所に。
ははは、本当に何故でしょう？

しかし、こうしていても仕方がない。

誰かに道を訊くとしましようか。

はあ、ともう一度ため息を吐き立ち上がろうとしたとき、

「千秋兄？」

いきなり知らない女の子に声を掛けられました。

まず目に付くのは肩まである綺麗な黒髪。

整った顔だち、意志の強そうな瞳、スタイルもいい。

美少女っというても差し支えない少女がそこにいた。

しかし、顔が何所となく……誰かに似てるような……。

「って、千秋兄？」

「こんな所で何してるの？ あ、やっと学校に行く気になったんだ。
良かった、みんな心配して——」

少女が何か言っているが無視。

というよりは、それどころじゃない。

えーっと、この子まさか……。

「織斑一夏くんとは……どうゆう関係ですか？」

何かとても嫌な予感がし、少しためらい気味に聞く。

すると、少女は一瞬キョトンとし、

「いきなり何言ってるの？　一夏と私は双子の兄妹じゃない」

さらっと、（俺にとっては）重大な事実を述べてくれました。

い、妹？　双子？

え、ちょっと待ってください。

いや、そんな馬鹿な……イレギュラーにもほどがあるでしょう……。
という事は織斑家は、

長女…千冬

長男…俺

次男…一夏

次女…この少女

こうゆう構成ですか？

まさか、すでにここまで原作ブレイクとは……恐れ入るというか、
もはや跡形もないですね原作。

まあ、そのブレイクの原因の一端は兄^{おれ}にもあるんですが……。

道理で、誰かに似ていると思ったら姉である千冬に似ている訳ですね。

小さい千冬といった所でしょうか。

「どうかしたの？　いきなり黙って」

急に天を仰いだ俺を不審に思ったのか、眉を寄せ少女が聞いてくる。

「……あなたの名前、漢字はどう書くんでしたっけ？」

まさか妹に、名前は何でしたっけ？ と聞くのは明らかに不自然すぎるので、何とか誤魔化しながら名前を聞き出す。

「美しい夏って書いて美夏だよ、いきなりどうしたの？」

美夏、それが妹の名前か。

というか、兄妹全員に季節が入ってますね……春はありませんが。嫌われてるんでしょうか、春。

「いや、何でもないですよ」

自然な感じで返す。

「ふーん。……何か変だよ、今日の千秋兄……しゃべり方も変だし……」

「少しキャラを変えてみようかと思ひまして」

これで誤魔化す、それしか手はない。

ちなみに一夏は普通に納得してくれました。

単純は楽で助かります。

何か言いたそうでしたが、美夏はそれ以上追求することはせず、素直に引き下がった。

「さっきの話だけど何でこんな所にいるの？」

「いえ、学校に行こうかと思ったんですが、迷ってしまったんですよ」

「学校の場所も忘れちゃったの？」

残念な人を見る目でこちらを見ないでください。
視線で何故か心が痛むので、強引に話題を変える。

「あなたこそ、学校はどうしました？」

「今日は休み。創立記念日だから。公園こうえんにいるのは、朝のランニングの途中」

それでランニングウェアにハーフパンツを着用しているんですか。

「そうだったんですか。出来れば学校まで案内してくれませんか？」

「いいよ、っていうか千秋兄が通ってる藍越高校って方向逆だよ……」

呆れた、と言わんばかりの声音で言われる。

逆方向だったとは……なるほど、道理でたどり着けないわけです。

「千秋兄って、もしかして方向音痴？」

反論できませんでした。

★★★

あの公園から歩くこと数十分。

ようやく藍越高校の正門前に着いた。

結構遠かったですね。

逆方向から、しかも喋りながらゆったりと来たので仕方ないといえ
ば仕方ないですが……。

「本当に助かりました」

「どういたしまして、っていうか、その喋り方本当にやめて。違和
感すごいし」

なんて事を言われたが、

「無理ですね、こういうキャラに決めましたから」

この設定を貫き通す。

可愛い妹に嘘を吐いてる？

嘘も貫けば真実になります。

「じゃ、頑張ってね」

「ああ、ありがとうございます」

お札に美夏の優しく頭を撫でる。

「ちよっ、はえ、何で!？」

顔を赤くしてあたふたと狼狽える妹。

なかなか可愛いですね、癒されます。

しかし、予想以上の反応ですね。

嫌では無いようで、気持ち良さそうに目を細める。

猫みたいですネ。

「あっ……」

手を放すと残念そうに、自分の頭に触れる。

そしてはっ、と我に返り、まだ顔を赤くしながら、

「むっ。やっぱり変だよ、なんだか千秋兄じゃないみたい」

それはまあ、別人ですからね。

「また後で撫でて差し上げますよ」

「もうっ、そうゆう問題じゃないよ!」

「はいはい。じゃ、俺はそろそろ教室に向かいますので」

「馬鹿っ、もう知らない！」

妹の照れ隠しを軽く流し、校舎に向けて歩き出す。
時間的には一限目の途中といったところでしょうか。

「ううー」

振り返って妹のほうを見るとまだ顔を赤くし唸りながら、こちらを睨んでいました。

まあ、ちっとも迫力はありませんが。

いや、むしろ微笑ましいですね。

未だに唸っている妹に手を振り校舎に入る。

一年の教室はあっちのようですね。

ロッカーで上履きに履き替え（ロッカーには名前が振られていて分かりました）クラスに向かう。

今はまだ授業中らしく、校舎内は静かでした。

一年の教室は1階のようですぐに見つけられました。

「ここですね」

自分のクラスの前にたどり着く。

では、入りましょうか。

教室なんて何年ぶりでしょうか？

少し昔を懐かしみながら、俺は教室のドアを開けた。

第2夜 予想外（後書き）

妹の登場でした。

ちなみに美夏は一夏とは違う中学に通っています。

結構、気に入ってます。

これからも活躍？するかも……

第3夜 喧嘩（前書き）

えーっと、主人公が結構酷いかも……。

最初と最後の方、話変わりすぎのような気が。

まあ、とりあえず主人公の本性が一部出ます。

第3夜 喧嘩

side 美夏

私は家に帰り、ランニングの汗を流すためシャワーを浴びていた。
ジャー、とシャワーの音だけが浴室に響く。

さっき千秋兄に優しく撫でられた所にもう一度触れる。

顔が赤くなってくるのを自分で自覚した。

って、重要なのはそこじゃないっ、いや、そこも重要だけど今は違うでしょ、私！

思わずニヤケそうになるのを何とか堪え、さっきの事を思い出す。

まるで別人みたいだった千秋兄の事を……。

〳〳回想〳〳

「はっ、はっ、はっ、はっ」

今、私はランニングの最中。

平日は学校が終わってから走るけど、今日は学校が休みなので朝からランニングをしている。

学校のクラブには所属していないので運動不足解消のためとスタイル維持のために、と始めたらいつの間にか日課になっていた。

「ふう……」

顔の汗を拭う。

コースの折り返し地点のとある公園に着く。

一息つき、いつも休憩のために使っているベンチに向かうと、

「あれ？ ……もしかして千秋兄？」

ベンチには制服を着た千秋兄が座っていた。

何か空を見上げて……あ、ため息ついた。

でも、あの千秋兄が外に出てるなんて……明日は絶対に雨だね。ちょっと失礼なことを思いながら近づいていく。

制服着て、こんな所で何してるんだろう？

「千秋兄？」

私は千秋兄が座ってるベンチに近づき、話しかけた。

話していると別人みたいだった。

本人はキャラを変えたっていうけど、何か違う……。

千秋兄だけど千秋兄じゃない……変かもしれないけどそうとしか言えない。

外見は同じだけど中身が違うの。

前の一人称は『僕』だったのに、『俺』になってるし。

それなのに口調が丁寧で……。

一体どうしちゃったんだろう、千秋兄……でも暖かくて、優しくかったなあ。

優しく撫でられた所にまた触れる、今度は顔がニヤケるのを止められなかった。

side千秋

ガラッ

横開きの扉特有の音を響かせ、教室に入る。

その瞬間、突き刺さるクラスメイトと教師の驚愕の視線。
教室の空気が止まった。

……あれ、もしかして俺、教室を間違えましたか？

「お、織斑か……？」

周りを代表するように男性教師が呆然と呟いた。
そのとき俺がまず思ったことは、

（教室を間違えた訳ではなさそうですね）

少しホッとしてました。

そのまま突っ立っている訳にもいかないので、

「ええ、織斑です。で、俺の席はそこでもいいんですか？」

窓側から二つ目の列の最後尾。

その空いている席を指さしながら問う。

「あ、ああ、そうだが……」

「ん、了解です」

自分の机に鞆を置き、席に座る。

それにしても何故皆さん、こんなに驚いているのでしょうか。

「織斑あ、やっと学校に来る気になってくれたのか！ 先生うれし
いぞ！」

ようやく現状を理解したのか、
いきなり教師が大きな声で話し出す。

「は、はあ？」

訳の分からない事を言われた。

学校に来る気になった？

まるで今まで来てなかったみたいじゃないか。

「急に学校に来たくないって言い出して、登校拒否しやがって。大
変だったんだぞ、こっちは」

その言葉で俺は理解した。

妹が言っていた『やっと学校に行く気になったんだ』ってそういう
意味ですか……。

言われた時はスルーしてましたが、登校拒否とくの事だったんですね。

どうやら“俺”になる前の織斑千秋は、登校拒否の引き籠もりだっ
たらしい……。

キンコーンカーンコーン

「今日はここまでだな。じゃ、起立、礼」

俺が教室に入ってから十分程度でチャイムが鳴って授業が終わる。

「織斑、よく戻ってきたな」

教師が教室を出ていく前にポンっ、と肩を叩いて言ってきた。
引き籠ってたのは“俺”じゃないんですが……。

はっはっはっ、と笑いながら出ていく教師。
何を笑ってるんだか。

「……………」

そんな事より教室に入ってからこの視線……何人か、少なくとも

4人以上に睨まれていますね。

明確な敵意と嫌悪。

一体何なのかは知りませんがマナーがなっていませんね、まったく。

でも、特に問題がある訳でもないのでスルーすることに決め、机に突っ伏した。

★★★

「ん……」

四限目が終わり、昼休みに入った。

ほとんどの授業で寝ていて鈍った身体を軽く伸びをしほぐしながら、周りを見る。

他の生徒は食堂に走って行ったり、持ってきた弁当を広げたりと、それぞれ食事タイムに入っていた。

「さて、俺も食堂に行くのでしょうか」

当然、弁当は持って来ていないので、俺は必然的に食堂に向かうことになります。

お金？

持ってますよ、“千秋”くんの財布を。

泥棒？

ははは、今は俺が千秋ですので何も問題ありません。

と、言っても本気で食堂に行くつもりは毛頭ありませんが。

いい加減に視線が鬱陶しくなってきたので、そろそろ駆除しましょうか。

案の定、俺が教室を出ると後ろから何人かがつけて来ました。

馬鹿の集まりで助かりました。

「……………」

黙って歩くこと数分。

人が滅多に来ないであろう校舎裏に着く。

さてと、

「では、そろそろ出てきたらどうですか？」

つけてきた連中に呼びかける。

すると、なんという事でしよう。

あちらこちらからぞろぞろとゴキブリみたいに湧いてきました。

全員で7人。

女が3人、男が4人。

如何にも不良です、と言いたそうな恰好。

指輪やらネックレスやらチェーンと、ジャラジャラ鬱陶しくないのでしょいか？

何でも着ければ良いってもんじゃないと思うんですが……。

「何か御用で？」

一応、聞いてみる。

するとリーダー格らしき男が一步前に出て言ってくる。

周りはニヤニヤとキモイ笑みを浮かべている。

「よう。久しぶりじゃねえか織斑あ？ 俺を覚えてるかあ？ まあ、忘れるわけないだろうがなあ。あれだけ虐めてやったんだから」

いや、俺とは初対面ですけど。

まあ、それは置いとして、

その間に近くの木陰に近づき、えーっと、これをこうして……うん、準備完了。

はい、ポチッとな。で木陰から離れる。

「俺は何の用かとお聞きしたんですが……」

あなたが誰かなんて生ゴミ以上にどうでもいいんですよ。
国語力が足りなさすぎですね。

「用？ そんなもん決まってるだろ。友人として登校再開を祝ってやろうと思ってなあ」

言うと同時に周りの男がニヤケながらゆっくり近づいてくる。
女3人は見てるだけのようだ。

「祝いねえ……何かくれるんですか？」

俺の一言に、

「ああ、くれてやるぜ。最高の暴力^{プレゼント}をな!!」

前にいたリーダー格が飛び出して、蹴りを放ってくる。

型も重心も滅茶苦茶な素人丸出しの蹴り。

それを軽く横に躲し、そのまま流れるように顔面にカウンターを叩き……込まずにわざと距離をとる。

「……ずいぶんと陳腐な贈り物ですね」

少し離れ、そこから話しかける。

「くくく、お前にチャンスをやるよ。明日、5万もってこい。そして
たら今回は勘弁してやるよ」

「どうすんだよ、おら」

「素直に払ったほうが身のためだよー、あはは」

周りも便乗し騒ぎ出す。

そんな中俺は、

「はあ」

額に手を当てながらかぶりを振り、ため息を吐いた。

「てめえ……」

なめられたと思ったのでしよう。

それを見たゴミの集まりが額に青筋を浮かべる。

しかし、そんなことは無視し、

「まったく、もっと何かこう、個性ユーモアのあるセリフを期待してたんですが……」

「んだと？」

「ありきたりでつまらない台詞しか出てこないとは……まあ、あなた達みたいなゴミに期待した俺が悪かったですね。すいません」

素直に謝る。

やっぱり人間、素直でないといけませんからね。

「では、お詫びと言っては何ですが、俺からもチャンスを与えてあげましょう。もう二度とその汚い面を俺の前に晒さない、というのなら見逃して差し上げますが？」

薄く笑いながら言う。

その言葉で不良たちの顔が憤怒に歪む。

「あれだけやられて、まだ分かってねえみたいだなあ………忘れたのなら思い出させてやるよ!!」

予想通りキレた一人が突っ込んできた。

「おらあ！」

大振りの拳。

まったく、遅すぎる。

さっきと同じように躲しながら相手の懐に入り、

「プレゼント・フォー・ユー」

股間こかんに向かって蹴りを一発。
つまりは……金的である。

「ぱうつつ!!!」

意味不明なうめき声？ をあげて倒れる不良その1。
あっ、泡吹いてる。
ご愁傷様です。

「ん？ もう終わりですか？」

残った不良ノブの方を向いて挑発する。
しかし、挑発それに答えたのは意外にも、

「何調子乗ってんのよ、あんた!!!」

「あたし達の奴隷の分際で」

「調子乗ってんじゃないわよ」

男どもの後ろにいた女3人だった。

それにしても少々、語句のボキャブラリーが少なすぎませんか。

「哲、やっちゃっいなさいよ、こんな奴」

「分かってる」

1人の女がリーダー格に言う。
哲と呼ばれたリーダー格が、

「マグレで倒してうれしいか、腰抜け？」

鼻を鳴らしながら偉そうにふんぞり返りながら言ってくる。

「別に特には。あなた方も蠅を潰したところで何も思わないでしよう？」

肩を竦めながら一言。

「調子に乗るな、カスがああああ！！」

今度は3人で来る、が特に対応が変わる訳でもない。
訓練されたプロの連携ならともかく、ただの素人なら一対一を三回連続で行うと考えればいい。

まずは突っ込んで来た一番近い奴の鼻っ柱に拳を叩きこむ。
それで終わらせず髪を引き寄せ、ついでに、と顔面に膝蹴りも食らわせる。

そのまま次の奴に素早く首筋に手刀1発と鳩尾に拳を一発。
さらに前のめりに倒れこんだ顔面にひじ打ちでトドメ。
最後に残ったリーダー格は右腕を絡め捕り、関節を……

「ぎゃあああああ腕がああああ！！」

外した。

そのまま、残ったも左腕も外す。

「うるさいですね。関節を外したぐらいで喚くなよ」

激痛で地面にのた打ち回るリーダー格の腹を踏みつけ黙らせる。
そして、

「さて、後は貴方たちだけですな」

呆然と立ち尽くす女3人にゆっくり近づきながら言う。

「な、何よ!? 女に手を出すつもり!?」

「ISも使えない無能な男の分際でっ!」

「まったく、何言ってるんです? 手なんて出しませんよ」

それを聞き、あからさまにほっ、と安堵する3人。

とりあえず一番近くに居た女の腹に前蹴りを叩きこむ。

「ぐふっあ……あ」

「なっ、あんた手を出さないって言ったじゃない!」

何を言ってるんでしょう?

当たり前じゃないですか。

「生ゴミなんか手を出すはずないでしょう? 汚くて手が汚れちゃうじゃないですか」

それに出したのは足ですし。

「ぐふっ……ううあ……」

倒れた生ゴミの頭を踏む。

「なっ、あ……あんた……」

残ったゴミが何か言っているが無視。

「まさか、女だからって見逃してもらえなくても本気で思っていたんですか？」

ぐりぐりと倒れた女の頭を踏みにじりながら言う。
すると、さっきまでの威勢はどこに行ったのか、

「ご、ごめんなさい。も、もう、しませんから……ゆ、許して、もう、許してよお……」

ペタン、と震えながら腰を抜かし、懇願してくる。

「無理ですね、ゴミは処分しないといけませんから。と言いたい所ですが、これ以上やると流石に言い訳が苦しくなるので……そうです、もう俺に関わらない、というのなら見逃して差し上げますよ？」

「わ、分かりました、もう、関わりませんからあ……ゆ、許してください……」

頭から足を退け2人に近づき、

「因みに、この事は他言無用ですよ。」

まあ、別に話しても構いませんが、証拠もあるから貴方たちが不利なだけですよ?」

さっきの木陰の携帯を回収、ヒラヒラと見せつける。

「それに……次はこんなものじゃ済ませませんから……」

クスッ、と嗤いながら耳元で呟く。

震えながら頷いたのを見て、

さて、では用も済んだ事ですし、教室へと戻りますか。

第3夜 喧嘩（後書き）

……どうでしょう、最初はもっと外道な感じだったんですが、さすがに自分でも引いて、ちよつと加減し、書き直しました。

これでも非道いでしょうか？

それとも中途半端でしたか？

まあ、とにかく主人公は外道という事が解かってほしかったんです。

そして、その内優しい千秋も書こうかなと思っております。

第4夜 買い物（前書き）

やっと、時間ができました。

出来れば2、3日に一回更新したいんですが、少しキツそうです。

出来るだけ早く更新できるように頑張りますので許してください。

第4夜 買い物

side 千秋

カーテンの隙間から差し込んだ朝日で目が覚める。
学校に行き始めてから数日。

今日は土曜日なので、学校は休み。

ISの世界に来て約二週間ほど経ちました。
こちら
そろそろこの部屋にも慣れてきましたね。
ベットから這い出し、あくびを一つ。

ちなみに、あの不良共は何も言わなかったようです。
せっかく、証拠映像を俺に都合のいいように合成したのに無駄にな
ってしまいました。

結構、会心の出来だったんですが……残念です。
まあ、終わったことですし、別にかまいませんが。

さて、とりあえず着替えますか。
寝巻きを脱ぎ、筆筒の中を漁る。

「千秋兄い、起きてる?」

突然ドアが開き、美夏がひよこつと顔出す。

「ノックなしに人の部屋に入るのは感心しませんね」

「え、あ。ご、ごめん！」

今、俺は着替えの真っ最中。

上下ともまとめて脱いだので、現在はパンツ一枚。

美夏はそれを見て、顔を真っ赤にし慌ててドアを閉めた。

ダダダダ、と階段を駆け下りる音が響く。

裸を見たぐらいで何を慌ててるんでしょうか？

（ば、ばっちり見ちゃった……ああ、凄い身体だったなあ）

ブルッ

いきなり背筋に悪寒が……。

何か嫌な気配……一体なんでしょうか？

着替えを終え、部屋を出る。

「お、千秋兄。おはよう」

リビングでは一夏が朝ご飯の用意をしていました。

ご飯は毎日、一夏と美夏が二人で作っているようです。

織斑千秋君は何をしてたんでしょうか？

学校に行かずに引き籠って、家の用事もしないし、バイトをしてる訳でもない……。

これで家でニコニコ動画見てたら、完全にダメ人間じゃないですか

……。

もし、本当に平行世界の俺だったなら、かなりショックです。こっちの自分？　の余りのダメっぷりに落ち込んでいる俺の鼻に、おいしそうな味噌汁と焼き魚の匂いが漂ってくる。

「ん、良い匂いですね」

「だろ。特に味噌汁は自信作だぜ。あ、そういやさっき、美夏が顔真っ赤にして降りてきたけど、どうかしたのか？」

台所から一夏がエプロンを外しながら出て来る。

やけに似合ってますね、まさに“主夫”って感じです。

「さあ、トイレに行きたかったんじゃないですか？」

裸を覗かれた事は伏せておく。

一応、妹の名誉のために……。

「ふーん、そうだったのか。まあ、確かにあの突如襲ってくる朝の便意はやばいよな……学校ある日とかは特に」

うんうん、と納得する一夏。

すいません、美夏さん。

俺のフォローのせいで、もしかしたら余計に不名誉な解釈をされてしまったかもしれません……。

心の中で全力で妹に謝っておいた。

「それじゃあ、仕方ないな。先に食い始めるか、冷めたら勿体無いしな」

「そうですね。きっとその内、出てきますよ。では……」

「「いただきます」」

美夏がリビングに入ってきたのはそれから5分後だった。
今までどこに隠れてたんでしょう？
まさか、本当にトイレに行ってたとか……。

★★★

「ねえ、千秋兄。今日、昼から何か予定ある？」

朝ごはんを食べ終え、リビングのテレビを見ながらソファで一服していた時、美夏が聞いて来た。

今日の予定は……、

「一応ありますね。何故です？」

「う、うん。もし無いなら、その、デ、デー……」

「デ？」

「い、いや、あの、うん、買い物！ 買い物に付き合ってほしかったんだけど……（恥ずかしくて、い、言えないよお……）」

「デート、ですか？」

「はうっ」

顔を真っ赤にして俯く。
やっぱり癒されますね。
小動物みたいです。

「い、言いたいこと、わ、分かったの？」

「ええ、まあ」

そんなに鈍感じゃありませんからね。

肝心なところを聞き逃す、なんて事をするのは一夏くらいです。
まあ、馬鹿ですからね。

「もうっ、千秋兄のいじわる！」

「意地悪じゃありませんよ。からかっただけです」

「それ、同じ！」

ふんっ、とそっぽを向く妹。

前にも、似たような反応をされたような……。

「すみませんでした。そんなに拗ねないでください」

「……………」

「買い物なら付き合いますから」

「……………」

「一緒に来てくれたらスイーツ奢りますよ」

ピクッ、と眉が反応する。

もう、一押しですね。

しかし、スイーツで反応するとは、さすが女性ですね。

「お願いします。俺には美夏しか頼れる人が居ないんですよ」

「えっ、私しか？ ……仕方ないなあ、もう。千秋兄ったら……………えへへ」

今までの無言が嘘のようです。

顔を赤くし、くねくねと悶えだす。

結構、扱いやすいですね。

この単純さ、やっぱり一夏と双子で間違いないですね、うん。

まあ、買い物に関しては俺もちょうど服を買いに行こうかと思ってましたし。

何故服が必要かと言うと、理由は簡単。

この家に俺の服は一枚も無いのだ。

今着てる服もすべて、織斑千秋の物ですし。

別にサイズが合わないとかそういう事はありませんが、服と靴は自分の好みの物が良いですからね。

お金？ ……自分で稼ぎましたよ。

織斑千秋君のは使ってません。

方法？

犯罪はしてませんよ、ちょこっと、色々ただけです。

「じゃあ、お昼は向こうで食べる？」

「ええ、構いませんよ。では、もうすぐ出ますか？」

「うん、そうだね」

「ついでに一夏も誘いましょうか？」

分かってて聞く。

すると、

「絶対ダメ！ 二人で行くの」

速攻で拒否された、予想以上の反応で……。

二人で、をやたら強調されたし。

「分かりました。じゃあ、準備をしましょうか」

俺は部屋に戻って、ショッピングモールに行く準備を始めた。

第4夜 買い物（後書き）

感想などがありましたらドンドン書いてください。

気付いた事や指摘などでも結構です。

第5夜 食事（前書き）

遅れて本当に申し訳ありません。

学校が忙しすぎて、なかなか執筆をする時間がなくて。

一先ずは落ち着きましたが、これからも遅れることが多々あるかもしれないがご容赦ください。

第5夜 食事

side 千秋

「さて、準備は完了ですね」

何の準備かと言うと、もちろん買い物のための準備。
まあ、準備と言っても特にする事も無いのですが……。
せいぜい、サイフを持って上着を羽織ることぐらいでしょうか。

しかし、女性はそう簡単ではないようで、

「美夏、まだですか？」

階段の下から呼びかける。

「うん……。もうちょっと……」

外出のための準備にかかる時間が半端なく長い……。
準備にどれだけ時間をかけるんですか。

かれこれ1時間以上……。いや、あと少しで2時間に到達しますね。

「はあ、了解です」

溜め息をついた俺は悪くない。

男にとってこの時間は正直かなりキツイ。

時間をかける理由も理解できるから、強く言う事もできませんし。とりあえず少しでも時間を潰すために先に玄関で靴を履き、外に出る。

それから玄関前で待つこと数分、

「お待たせ。あの、へ、変……かな……?」

玄関が開く音がし、ようやく美夏が出てきた。

玄関には、胸元にリボンが付いた青と白を強調したワンピース。普段はしていない化粧を薄くしている美夏が立っていた。

「いや、良いんじゃないですか」

普通に考えて、ここで“似合わない”とか“変だ”とは口が裂けても言えないですよね?。

そんな事を言えるのは余程空気が読めない阿呆ぐらいですね。

……いや、もしや一夏なら……、

『うーん、もしかしたら赤とかの方が似合うんじゃないか?』

とか爽やかな笑顔で言うかも……あり得る、というより、否定出来る要素がまったく見当たらない……。

あの鈍感男なら……恐るべし、織斑一夏。

まあ、それは置いといて。

特に変な所は無いですね。

俺に服のセンスはありませんので、
あくまで素人目に、ですが。

「そ、そう？ ……よかった」

美夏は安心した表情になりホッ、と一息、吐いた。

「では、行きましょうか」

ようやく買い物に出発したのだった。
時計は既に昼前を指していた。

★★★

ショッピングモールに着いたのは昼過ぎ。
先に服を見てから、後でゆっくりご飯を食べようかと思ってたんですが……。

「もうお昼ですね、……先にご飯にしますか？」

歩きながら美夏に聞いてみる。

先に昼食を食べることになりそうですね。

「うん、千秋兄が良いなら、私は良いよ」

なら、決まりです。

まずは食事にするのでしょうか。

「美夏は何が食べたいですか？」

このショッピングモールはかなり規模が大きい。

そのお陰か、かなりの数の飲食店や専門店が存在している。

大抵の物はここで食べられるだろう。

それぞれの筋で有名な店も幾つかあるようですし。

「私が勝手に決めて良いの？」

「構いませんよ」

どうぞ、と手を振る。

分かった。と美夏は頷き、

「食べたいものかぁ……」

顎に手を当て頭を傾げる美夏。

そんなに悩むことでしょうか？

「千秋兄は何か希望無いの？」

私の好みで決めて良いの？、と俺に気を使ってくれる美夏。

「あなたが決めて良いですよ。俺はあまり食べ物に拘りとかは持ってませんから」

基本、腹に入ってしまったえば全部同じ、と俺は考えてますからね。だから好き嫌いは特にありません。もつとも、おいしいに越したことはありませんが。

しかし、そうは言ってもあくまで普通の食べ物に関してですから。“化学兵器”という言葉が頭に付く料理は無理ですからね……そこは勘違いしないように。

えっ、食べた経験ことあるのかって？
それは内緒です。

「それじゃあ、あそこにでいい？」

美夏が指差した方を見る。
そこにあったのは、普通のファミレスだった。

「二名様でよろしいですか？」

「はい、お願いします」

昼時にも関わらず待つ事無く、すぐに店の中に入れた。
客足はますます、といった所でしょうか。

「待つ必要が無くてよかったね。運がよかったのかな？」

「さあ、もしかしたら余り味の評判が良くないのかもしれませんがよ」

「今から食べようという時に、そんなテンションの下がること言わないでよ……」

ジト目で睨まれる。

「いや、無いとは言い切れませんよ？」

この真昼間にこれだけ空いてるんですしね。

「それでもだよ！」

「はいはい、俺が悪かったですよ。それに注文してみれば分かるでしょう」

降参、と両手を上げる。

「美夏は何を食べます？」

「ミートスパゲッティと海老グラタン」

もう決めていたのか、俺の質問に速攻で一言だけ呟き、ふんつ、とそっぽを向く。

拗ねた美夏は放っておいて、とりあえず注文をするために呼び鈴を鳴らして店員を呼ぶ。

ものの数秒で店員がテーブルに来る。

「注文をお伺いします」

「ミートスパゲッティと海老グラタンを1つずつとチーズハンバーグにライス（大）で……あ、後は……飲み物はドリンクバーでお願いします」

自分の物は適当にメニューから頼む。

「少々お待ちください」

店員は注文をメモに書き、一礼して厨房に戻った。そして十分程度で料理が運ばれてきた。見た目に異常はない。

いただきます、と手をあわせ、俺はハンバーグを、美夏はグラタンを一口。

味は……、

「ん、意外と普通……」

「……普通ですね」

味は普通だった。

不味くもないが、また食べたい！　と思うほど美味しい訳でもない。可もなく不可もなく、といった言葉がぴったり当て嵌まる。

「千秋兄」

「はい？」

いきなり名前を呼ばれる。

「不味くなかった」

「え……いきなり何「いいから答えて」……まあ、確かに不味くはなかったですね」

「じゃあ、さっきの事を謝って」

「さっきの事？」

言われた意味が分からず首を傾げる。

「さっき、この店がおいしくないかも、とか言った事だよ！」

「ああ、そんな事ですか」

「そんな事！？ そんな事って言った今！！？」

「いや、それは……」

ん、待てよ。

でもそれ、何故に美夏に謝るんですか……。

「だって、私が選んだ所が間違い、みたいな言い方をしたから」

いや、そんなつもりで言ったんじゃないんですが……。
どうやらご立腹の理由はそういう事らしい。
美夏からはドス黒いオーラが出ている……。

「だから謝って。今すぐ、早く、速攻で、誠意を籠めて！」

いや三つとも同じ意味ですから。

これ、俺は悪くないような気が……。

しかし、ここは素直に謝るのが吉ですね……。
目の前の鬼神^{みなつ}を収めるのが先です。

「それに関しては本当にすいませんでした」

頭を下げる。

しかし、

「ふーん……謝るだけ？ それだけなんだ……ふーん」

そんな美夏の嫌味全開の台詞に、

「……後で、高級スイーツを謹んで奢らせていただきます。お嬢様」

そう約束するのだった。

残念ながら、俺の財布の中の諭吉たちは今日が命日になりそうであ

った。

第5夜 食事（後書き）

本当はここで買い物が終わらせるつもりだったんですが、二つに分けます。

早くバトルとか書きたいです。

しかし、当分はこんな感じかも……。

感想、アドバイスなど、お待ちしております。

第6夜 贈り物（前書き）

また遅くなってしまった……。

いや、本当に申し訳ありません。

当分こんなペースになるとは思いますが、ご容赦ください。

ISの創作なのにISがまだ一度も出てない気が……。

第6夜 贈り物

side 千秋

「腹は膨れましたね、……俺の財布は痩せましたけど……」

あれから謝罪という形で美夏にパフェやらケーキやらを大量に奢らされ、諭吉さんが一人と野口さん二人が逝かれました。

ああ、良い人達だったのに……成仏してください。

まさかファミレスで万札が消えるなんて思いませんでした。

いや、お金自体はそれなりに稼いだので問題ないですが、しかしそんなに食べたら体重が大変な事に……まあ、つまりは太る――

「今、何か余計なこと考えなかった？」

ギロツ、と睨まれた。

くっ、無駄に鋭いですね……。

「いや、美夏は可愛いなあって思ったんですよ」

俺は咄嗟に、笑顔を美夏に向けながらそう言った。

またあのダークなオーラを出されても困るので結構、本気で誤魔化しにかかる。

いや、我ながら見事な演技。

だけど、少々効果がありすぎたのか……。

「はえっ、か、可愛いっ!？。だ、ダメだよ、千秋兄、そんな急に、
こうゆうのは優しくベツトでアクロバティックにジャストフイート
で——」

言ってることが支離滅裂すぎる……というか、まったく意味が分かりません……。

完全に暴走してますね、これは。

いや、まあ、だからこそ、からかうのが面白いんですが。

しかし、だからと言っていつまでも眺めている訳にはいけないので、

「てい」

「いたっ、ってあれ？」

暴走する美夏の額にデコピンを一発かます。

はっ、と正気に戻った妹に、

「正気に戻ったようですね。じゃ、行きましょうか」

「え、ちょっと待って。千秋兄」

そう言って美夏を置いて歩き出す。

結構時間を使いましたし、そろそろ本気で買い物に行きたいですし。
美夏が慌てて後ろについてくるのを後目で確認し、俺は完全に目的地に意識を向けたのだった。

s i d e

美夏

「26500円になります」

「ん。じゃあ、これをお願いします」

「はい、では3万円から——」

服屋に入ってから千秋兄の行動は速かった。

普通、服を選ぶのって結構、時間を掛けると思うんだけど（少なくとも私は掛かる）、千秋兄は迷う事そんな事無くポンポンと決めていった。

試着は面倒だから、ってしなかったし。

色使いは全体的に黒がメインの服やズボンばかりだった。

確かに金色の髪と相俟って、似合うと思うけど……もう少し、他の色も買ったら良いのに。

「待たせましたか？」

「ううん、大丈夫」

千秋兄がレジを済ませ、私の所に来た。

ちなみに私は先に店の外に出て待っていた。

服はちゃんと一緒に選んだよ？

これが良いとか、あれが似合うんじゃないか、とか。

恋人同士のデートみたいで恥ずかしいのか嬉しいのかよく分からなかった。

まあ、ほとんど千秋兄が自分で決めちゃったけど……。

「じゃ、行きましようか」

手には今買った荷物を持っていた。

上下合わせて、5着ぐらい買ってた。

行きましようか、と言って千秋兄は何処かに向けて歩き始めた。

私がある後ろを早足で追いかけ……ようと思ったたら、

「きゃあ」

ズドドドドッ！！ と、いきなり前から来たおばさん達^{マダム}の進行に巻き込まれてしまった。

えっ、な、何事！？ セールスでもやってるの！？

その時、頭の片隅で私の中では“急ぐおばさん^{セールス} 安売り” っていう方程式が成り立っているんだなあ、とまったく関係のない事を考えたり。

ていうか、ちょ、ちょっと待って、力強すぎない！？ い、息が苦しくなってきたよ。

中々、マダムの行進から抜け出せず、もみくちゃにされる。

「くぐ……ふはあ……」

何とか力を振り絞り、脱出する。

な、なんてパワーなの……恐るべしマダム大行進。

「ふう」

ああ、大変だった。と一息。

……ん？

一息ついてからようやく異変に気付いた私。

「あれ、千秋兄は……？」

辺りに千秋兄の姿はなかった。

「もしかして、はぐれちゃった？」

もしかしくなくても、そうだった。

無駄なくらい広いショッピングモールで迷子……それがどれだけ大変な事か、分かる人は分かるよね。

特にお子さんが居る皆さんは……。

はっ——そうだ、携帯だ！ と掛けてみるが電源が切れているのか繋がらなかった。

どうしよう……これほんとに不味いかも……。

自分の足でこの

はたして、迷子になったのは私なのか、千秋兄なのか……一体どちらなんだろうか？

いや、はぐれたのは間違いなく私の方なんだけどね。

くその頃の千秋く

「……美夏？」

先程からまったく喋らない美夏を不審に思い、何気なく千秋は振り返ってみた。

しかし、そこに美夏の姿はなく、視界に入ったのは混雑する人ごみだけであった。

千秋は一瞬呆然とし、そして現状を理解し、

「おい……一体、何やってるんですか、我が妹は……」

少し不機嫌な声音で呟いた。

いい年して迷子になった妹に対して、少々苛立った口調になってしまったのは仕方無いだろう。

このショッピングモールの中心。

中庭のような広い休憩所のベンチに私は一人座っていた。

「はあ、全然見つからないや」

もう三十分近く歩き回ってみたけど、私はなかなか千秋兄と合流出来ずにいた。

はあ、と再び溜め息が出た。

「うーん、本当にどうしよう？」

これは思ってた以上に大変だ。

まったく、これも千秋兄があの時助けてくれれば迷子こんな事にはならなかったのに。

千秋兄の馬鹿っ、と心の中で呟く。

見つけたらもう一回、何か奢らせてやる！

そう、決意してベンチから立ち上がる。

よしっ！　まずはもう一度、千秋兄が行きそうな場所を回ってみよう。

「君、可愛いね。今から俺たちと遊ばない？」

いきなり声を掛けられ、そちらに視線を向けると如何にも軽薄で遊んでそうな男が三人、ニヤニヤと締まりのない笑みを浮かべ立っていた。

「すいません、先約があるので失礼します」

適当にあしらって歩き出す。

町を歩いてると、たまにこの手合いに絡まれることがある。

こうゆうのは相手にしないのが一番。

「そんなのより俺たちと居る方が楽しいって」

「もしかして先約って女の子と？　ならちようどいいじゃん」

「おいしい店とか知ってるんだ、一緒に行こうよ。あ、もちろん俺たちの奢りで」

断ったのにしつこいなあ。

今は千秋兄を探さなきゃならないのに、本当に邪魔。

「用があるんです。邪魔しないでくれます？」

私はその場を早足で立ち去る。。

「そんな事言わないでさあ——」

しかし、まだ追ってきて執拗に誘ってくる。

私は本気で走って逃げようとして、

「キャッ」

誰かにぶつかってしまった。

すぐに離れて謝ろうとしたら、そのまま抱きしめられた。

えっ、ど、どういう事！？

混乱して顔を上げると、そこには千秋兄の顔が。

えっ、じゃあ、今千秋兄に抱きしめられてるの！？

私が状況を整理する前にさっきのナンパ男たちが追いついてきた。

「ねえ、待ってよ。そんな邪険にしないで——」

「失せろ」

しつこく追って来たナンパ男たちに向けて絶対零度の視線と声音で放たれる一言。

言葉を向けられた訳でも無い私がゾッ、と背筋が冷たくなったくらいだ。

向けられた男たちは堪ったものじゃないと思う。

そして思った通り、言葉にさすがのナンパ男たちも……、

「ぐ……お、男連れかよ」

「……しかたねえ。諦めるか」

ブツブツ言いつつも素直に退いて行つた。

でも顔を青くして、ちよつと震えてたような気がするんだけど――相当、千秋兄が怖かったんだ……。

「まったく……何をやってるんですか、あなたは？ いきなり居なくなつたと思ったらこんな所で面倒に捲き込まれて……」

ナンパから逃れ、ホッとした私の耳に呆れた声が響いた。

「ご、ごめんなさい。でもマ、マダムが」

「まあ、無事で何よりですが（……マダムって何だ？）」

「うん、ありがとう」

「あ、そうだ。はい、これ」

え？

いきなり千秋兄から小さい小包を渡される。
戸惑いながらも開けてみると、真ん中に綺麗なサファイアがはめ込まれたネックレスが入っていた。

「先程、この辺りを回ってる時に見つけたもの何ですが、美夏に似合いそうだと思ったので。まあ、今日一日付き合ってくれたお礼でことで」

「あ、ありがとう、大切にするね！」

私は嬉しさのあまり思わずその場で小躍りしそうになった。

この喜びは言葉にできないよ！

サファイアは私の誕生石。

私のためだけに千秋兄が買ってくれたもの。

気を抜けば、踊りだしそうになる体を理性を総動員して何とか抑える。

「では、そろそろ帰るとしましょうか？」

千秋兄の一言で正気に返る。

「えっ。千秋兄、他に何か買いたいのとか無いの？」

「ええ、欲しいものは全部買いましたから」

手に提げてた袋を持ち上げアピールする。

どうやら私を探しながら一通り回っていたみたい。

それなら良いか。

私としてはもう少しデートしても良いけど、千秋兄を困らせるような我侭は言わない。

「んじゃ、帰ろっか」

こうして私と千秋兄の買いも、じゃないデートは無事(?)に済んだのだった。

ちなみに帰り道。

私はネックレスを終始首に掛ったネックレスを眺めて、ニヤケが止まらなかったそうだ。

別に仕方ないよね、私は悪くないもん。

その日、千秋兄がくれたネックレスは私の一番の宝物になった。

第6夜 贈り物（後書き）

どうでもいい事ですが、やばいです。

最近、作者の腹が下痢ってる……。

しかし、学校のトイレって偶に紙が無いときありますよね？
トイレットペーパー持ち歩くべきか。

真剣に悩む今日この頃。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7921x/>

IS ～インフィニット・ストラトス～ 秋の夜空のFomalhaut

2011年11月26日17時50分発行